

21世紀に生きる子どもたちと学ぶ「アジアの中の日本」

—中高一貫の新しい社会科・地歴公民科教育を創造する中で—

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

小澤富士男・大野 新・小林 汎
篠塚 明彦・丸浜 昭・宮崎 章
吉田 俊弘

21世紀に生きる子どもたちと学ぶ「アジアの中の日本」

—中高一貫の新しい社会科・地歴公民科教育を創造する中で—

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

小澤富士男・大野 新・小林 汎
篠塚 明彦・丸浜 昭・宮崎 章
吉田 俊弘

21世紀を目前にして、新しい世紀へ残したいもの、残したくないものという論議があれこれとなされている。アジアと日本の関わりではどうだろうか。「従軍慰安婦」をはじめとする戦争犠牲者への謝罪・補償などの問題は、現在、日本政府に対する裁判が起こされており、問題は未解決である。朝鮮半島では、まさに歴史的な出来事といえる南北首脳会談が実現し、分断に終止符をうつ方向へ、大きな一歩を踏み出して新しい世紀を迎える。しかし、日本と朝鮮民主主義人民共和国との関係では、新しい世紀へ課題が積み残された。アジアと日本の関係で、もっと早くに解決すべきことで、新しい世紀に引き継がれていくことになる問題は少なくない。

しかし、過去の負債を背負うだけでなく、新しい、未来につながるアジアと日本の関係も確実につくられてきている。例えば、若者の中には軽視できない「大国主義」的な傾向もみられるが、一方で、古い世代とは違った形で積極的に、物怖じせずに「アジア」の中に入りこんでいくエネルギーも生まれている。修学旅行で韓国などを訪れる機会も増し、アジアに関心を持ち旅をする若者も多い。教育をめぐる日韓・日中の交流も盛んになった。こころみに、「アジアの中の日本」の語でインターネットを検索してみると、数百件の事柄にヒットした。「アジアの中の日本」は今日の日本を考える一つのキーワードになっており、21世紀にはどのような関係をつくりあげていけるかが、多くの人々の関心と呼ぶテーマとなってきている。本校の社会科も、上記の研究テーマを掲げて3年目を迎えた。

3年目の今年度は、昨年に引き続き、各科目で「アジアの中の日本」を意識した実践の積み上げを行っている。

地理分野では、中学では、世界地理でアジアを扱うだけでなく、沖縄学習を通して日本とアジアの関わりをみたり、韓国人被爆者や在日韓国朝鮮人の生活もとりあげてきた。高校では、環境問題を中心にアジアと日本のかかわりを学んだ。現社・公民分野では、中学では、ODAに関わる諸問題や、アジアの人権問題を扱った。高校では、アジアの経済発展の過去・現在・未来という推移を、日本との関わりで学んだ。歴史分野では、中学では、近現代史だけでなく前近代史でも東アジアとの関わりを重視する。高校世界史では、日本を東アジア世界に位置づけ世界をとらえる。高校日本史では、戦後の日韓関係やベトナム戦争も学習した。さらに、テーマ学習「共生」では、在日外国人の話を直接聞く機会も設けて学習を進めた。

こうした中で、今年度の教育研究集会では中学の歴史とテーマ学習で公開授業を行い、実践の一端を見ていただき討議を行った。以下、この論集には、中学の歴史における授業実践・授業作りを報告する。これらの諸実践をいっそう進めるとともに、諸実践の全体的な関わりなどの整理を行っていくことが、これからの課題となっていく。

授業実践：日露戦後の世界と日本

——「アジアの中の日本」を考えることをめざして——

社会科 丸浜 昭

日露戦争後の日本と世界の関わりをアツかった授業の紹介である。日露戦争における日本の勝利が各地の民族独立運動に大きな影響を与えたことを導入として、ベトナムの「東遊運動」とそれに対するフランス政府の要求、日本政府の対応を取り上げた。日本と帝国主義の世界体制の関わりをとらえることをねらいとしている。

後半には、この授業をどのような問題意識にもとづいて構想し、何をねらいとしたか、その成果と課題をどう受けとめているかを記した。

キーワード 日露戦争後 東遊運動 帝国主義

(1) はじめに

本校の教育研究会で授業を行うのは3回目となる。1回目は、中学の歴史で世田谷における関東大震災時の朝鮮人虐殺事件を取り上げた。通史の授業の一環ではあったが、その中での位置づけを提起するというよりは、地域の歴史の掘り起こしの紹介という意味合いが強かった。2回目は、本校社会科の環境教育研究の一環として、高校日本史学習の中で環境問題を扱った。歴史学習の中で環境問題をどう扱うかという私自身が模索中のテーマで、授業実践としては課題ばかり残してうまくいったものではなかった。今回は、本校社会科の研究テーマ「21世紀に生きる子どもたちと学ぶ『アジアの中の日本』」の一環として、中学の歴史で表記のテーマを扱った。取り上げた教材自体は必ずしもオリジナルなものではなく、高校世界史などで同様の実践が行われている。その意味では、目新しい実践ではない。今回のねらいは、新しい教材や授業方法などの提起ではなく、この時期をどうとらえ、中学・高校の歴史学習の中でどうこの時期の基本事項を取り上げていったらいいかを考えたいということにある。

アジアと日本の歴史的な関わりをとらえるとき、日清・日露戦争期をどう扱うかはきわめて重要である。それが、近年、歴史学習の重要な争点のひとつもなっている。以下、まず授業の概要を示し、その上で、この授業を構想するにあたって検討してきたことなど

を記すことで、この論議に私なりに加わっていききたい。

(2) 授業の構想

今回の授業の指導案は、以下の通りである。

中学2年社会科(歴史)学習指導案

- | | |
|---------|----------------|
| 1 授業者 | 丸浜 昭 |
| 2 日時 | 2000年11月17日(金) |
| 3 授業クラス | 2年B組 |
| 4 単元名 | 帝国主義の世界と日露戦争 |
| 5 単元の目標 | |

日清戦争の結果は、東アジア世界に帝国主義を導き入れるきっかけとなった。この中で日本は、北清事変を経て日英同盟締結の道歩んだ。この同盟を通じて、日本は帝国主義の世界体制に組み込まれた。帝国主義の世界は日本の外側にあったものではなく、日本もこの世界を形成する一角になっていた。

日露戦争もこうした関連の中で見ていくことが重要である。日露戦争は、日本の民衆には何をもたらしたか、どのような課題を残したか。アジアなどの諸民族へはどのような影響を与え、また、日本が実際に歩んだ道はどのような道だったか。具体的史実を通して、日本との関わりの中で帝国主義の世界をとらえたい。この後の日本資本主義形成を学ぶ単元とあわせて、20世紀の世界と日本を考える

土台をつくる学習としたい。

6 単元計画（4時間構成）と本時のテーマ

- ①帝国主義時代の本格的幕開けと
北清事変・日英同盟・・・1
- ②日露戦争の経緯と結果・・・1
- ③日露戦後の世界と日本・・・本時
- ④韓国併合・・・1

7 本時の目標

日露戦争が欧米の圧迫からの解放をもとめる民族に与えた影響をみる。そして、アジアからの留学生の処遇を題材に、日本はこれらの民族の動きとどう関わっていかをを考える。実際の日本の対応の背後にあった帝国主義世界体制をとらえ、韓国併合を展望する。（また、時間的な余裕があれば、この時期のことを学ぶ意味を考えてみたい。）

8 本時の指導計画（下記）

（3）授業の概要

当日使用した授業プリントをもとに、概要を示す。囲みの中がプリントの原文である。ただし、（ ）の中は補った。また、資料<A>～<H>は別紙で配布していたが、囲みの中に組み込んで示した。

<プリント表題>

第7章 近代日本の成り立ち
(5) 帝国主義の世界と日露戦争（続き）
④ 日露戦後の世界と日本

<授業内容>

1) 日露戦争はアジアでどう受けとめられたか
フィンランドやトルコに残る（トーゴー）の名は何を示すか

導入として、横須賀の三笠公園で手に入れた「東郷

	学習項目	時間	学習内容	留意点
導入	日露戦争の受け止められ方	10分	東郷ビール、トルコのトウゴウ、さらにネルーとスカルノの文から、日露戦争の受け止められ方をとらえる。	現在、東郷ビールのラベルは日本で貼られているという
展開1	中国等の留学生「東遊運動」	10	東京には、中国・韓国の留学生が多数おり、ベトナムでも「東遊運動」が進められたことを見る	ファンボイチャウが日本に期待したことを考える
同2	フランス政府の要請	10	仏政府が東遊運動の取り締まりを日本政府に要求したときに、日本政府がどう対応したかを考える	判断の理由も含めて生徒の見通しを問う
同3	帝国主義世界体制と日本	10	日本政府の対応の背景に、日仏協約をはじめとする帝国主義国間の取引の条約・協定などがあることを見る。	関係地を地図で確認しながら進める
まとめ	アジアの指導者の声と韓国併合	10	孫文やネルーの文から韓国併合を展望し、日本の歩んだ道をとらえる	時間があれば、この時期を学ぶ意味を考える

<教材>

授業用プリント 資料プリント 東郷ビール空き瓶他
教科書「中学歴史」（教育出版）資料集「資料から考える総合歴史」（浜島書店）

<参考文献>

- 井口和起「日露戦争の時代」吉川弘文館（歴史文化ライブラリー41）1998
- 井口和起「日本帝国主義の形成と東アジア」名著刊行会 2000
- 内海三八郎著・千島英一他編「潘佩珠伝」芙蓉書房出版 1999
- 外務省編「日本外交年表並主要文書1840-1945」上 原書房 1965
- 鳥山孟郎「日露戦争とアジア（高）」（歴教協「歴史地理教育」321号 1981）
- 今野日出晴「日露戦争とヴェトナムからの留学生」（『いま学びたい近現代史』教育史料出版会 1997）

ビール」の空き缶・空き瓶、また、漫画「ゴルゴ・サ
ーティーン」で「トルコのトーゴー」が登場するところ
を使用した。中学生は、具体的な「もの」に対する
興味は強く、これまでも何か持っていけるものがある
ば持ち込むようにしてきた。東郷ビールについては結
構知っている生徒もいて、生徒とのやりとりが始まり、
対話をしての授業がやりやすくなった。なお、現在、
東郷ビールはフィンランドでは造られておらず、日本
でラベルが貼られているというインターネットの情報
がある。²

続いて、以下の資料をみた。

インドの独立運動の指導者ネールはこう書いた
<資料A>

アジアの一国である日本の勝利は、アジアのす
べての国々に大きな影響を与えた。私は少年時代、
どんなにそれに感激したかをおまえによく話した
ことがあったものだ。たくさんのアジアの少年、
少女、そして大人が、同じ感激を経験した。ヨー
ロッパの一大強国は敗れた。だとすればアジアは、
その昔、しばしばそういうことがあったように、
今でもヨーロッパを打ち破ることができるはずだ。

ナショナリズムはいっそう急速に東方諸国に広
がり、「アジア人のアジアを」の叫びが起こった。
しかしこのナショナリズムは単なる復古でも、旧
い習慣や信仰の固執でもない。日本の勝利は西洋
の新産業方式の採用のおかげだとされている。こ
の、いわゆる西洋の観念と方法は、このようにし
ていっそうの全東洋の関心を集めることになった。
(ネール「父が子に語る世界歴史」3日本評論社)

中国の孫文は、スエズ運河でこんな体験をした
<史料B>

私が船でアジアに帰ることになり、「スエズ」
運河を通りますときに、たくさんの土人(アラビ
ア人)・・・が、私が黄色人種でありますのを見
て、非常に喜び勇んだ様子で私に「お前は日本人
か」と問いかけました。私は、「そうではない、
私は中国人だ。何かあったのか、どうしてそんな
に喜んでいいのか」と問いましたところ、彼らの
答えは、「俺達は今、非常に喜ばしいニュースを
得た。何でも、日本はロシアが新たに欧州より派
遣した海軍を全滅させたということを知った。俺
達はこの運河の両側において、ロシアの負傷兵が船
毎に欧州へ送還されていくのを見た。これは、必

定ロシアが大敗した証拠だと思う。以前は我々東
亜の黄色人種は、いずれも西方民族の圧迫を受け、
苦痛をなめていて、まったく浮かぶ瀬がなかった。
だが、このたび日本がロシアに勝ったというこ
とは、東方民族が西方民族を打ち破ったというこ
になる。日本人は戦争に勝った。我々も同様に勝
たなければならない。これこそ欣喜しなければならない
ことではないか。だから我々はこんなに喜
んでいるのだ。」ということであった。これを見
ましても、日本がロシアを破ったということは、
アジア民族の全体にいかに大なる影響を与えたか
ということがわかる。

(孫文「大東亜主義」『孫文全集』第1巻)

次に、テーマをアジアからの留学生のことに移した。

2) アジアからの留学生

日本はアジア諸民族の運動の「拠点」とされた
1905年東京で孫文を総理とする中国同盟会結成
中国、韓国、フィリピンなどから日本に多数の留
学生・亡命者

中国人留学生は(一万)人をこえる

韓国人留学生 約(600)人

一万人とか数百の留学生は多いのか少ないのか。日
本からの留学生はどうだっただろうと問いかけてみた。
遣欧使節団に同行した津田梅子など幕末・明治初期の
留学生をイメージしていたのだが、あるクラスの生徒
からは「遣唐使」という予想外の声が出た。遣欧使節
団同行の留学生は「60名近く」と高校の日本史教科書
に記載があり、この時期のアジア留学生の規模の大き
さが推測される。³

「東遊運動」もこの状況の中で行われた。

ベトナムからも、独立運動の指導者潘佩珠(ファン
ンポイチャウ)が日本へ渡った

<資料C>

今日の世界情勢から判断して、同文同種以外の
国で、軍隊まで出してわれわれの独立運動を助け
てくれる国は世界中どこを探してもあるはずがない。
一番頼りになりそうな大国、中国は、同文同
種で最も近い隣土の国でありながら、その領土
は、列強の思いのままに切り取られ、満身創痍、
疲弊はその極に達し、ヴェトナムに対する宗主権
までフランスに譲渡してしまうような国、見渡す

ところ、黄色人種、国多しといえども、新進気鋭の国と言えば日本をおいて外にはない。いま、日本は世界の強豪大帝国ロシアを破り、海に陸に嚇々たる戦火を収めている。野心満々たる日本、利害を説いて頼めば、必ず我々を助けてくれると思う。出兵まではしてくれなくても、兵器を買うくらいの金は貸してくれるかもしれない。どうせ外国へ行くなら、成否は時の運、思いきって日本へ行くべきだと私は思う。

(潘佩珠に日本行きを進める発言「潘佩珠伝」)

そして、日本に留学生が送り込まれた

・・・(東遊)運動

<資料D>

ベトナムの独立運動の指導者ファン＝ボイ＝チャウは、「日露戦争は、実に私たちの頭脳に一新世界を開かした。…彼(日本)もまたアジアの黄色人種であり…あるいは全アジアの振興の志もある」と語っているが、このような感想や期待は多かれ少なかれ志を持つアジアの知識青年たちに共有されたのである。1904年4月に抗仏維新会を組織していたチャウは、日露戦争で勝利を重ねる日本に刺激され、日露戦争中の1905年4月日本に渡った。大隈重信や犬養毅らにあったチャウが、ベトナム独立運動への援助を彼らに要請したところ、武器援助より人材養成の方が重要であると説かれた。チャウはベトナムの青年を日本に留学させ、ベトナムの独立と振興に寄与できる人材を育成しようとした。これが東遊運動と呼ばれる日本留学運動であるが、ベトナム留学生の数は1908年には200人以上を数えたという。

(歴史学研究会編「講座世界史5」より)

このころ、ベトナムはどうなっていた?

・・・(フランスの植民地)

日本語訳されたベトナムの教科書からとってプリントに載せたファンボイチャウの写真は省略するが、まぎれもなくアジア人の顔であり、名前とともに何となく親しみを感じて印象に残りやすい。このチャウと東遊運動をめぐる以下の事件が、この授業の一つの柱となる。

3) フランスからの要請と日本政府の対応

こうした東遊運動をフランスはどう思うだろう

1907年仏政府から日本政府へ

・・・(留学生取締り・退去命令の要求)

日本政府はどうするだろう…

日本政府はどうするだろうという問(どうすべきとかどうしたいかではなく、実際にどうだったであろうという予測である)に、研究授業の時は早くに<資料F>を見つけた生徒がいて、多様な声を引き出すことに失敗してしまった。しかし、他のクラスでは結構いろいろな意見が出た。フランス政府の要請に応じたであろうという理由としては、「フランスの方が力が強い」「応じなければ日本が損をする」など、応じなかったであろうという理由としては、「日本はアジアの国」「正当でない要求にこたえる必要はない」などというニュアンスのものが多かった。挙手をさせてみると、応じたの方が多いが、圧倒的というほどではない。応じなかったと考えた生徒が予想以上に多かった。

このあと、すぐに政府の対応をみるのではなく、次のように進めた。

4) 日本政府の対応の背景にあったこと

まず、日仏協約の条文をみた。日仏協約という名前を消し、パリで結ばれているから日本とフランスの間の何らかの取り決めらしいということから推測することから始めた。

<資料E>

(日仏協約)

明治40年(1907年)6月10日「パリ」

於て署名

明治40年(1907年)6月17日官報掲載

日本国皇帝陛下の政府及び仏蘭西共和国政府は、両国の間に存在する友好の関係を鞏固にし、且つ将来誤解の原因を両国の関係より全然除去せむことを希望し、之が為左の協約を締結することに決定せり。日本国政府及び仏蘭西国政府は、清国の独立及び領土保全並びに清国に於いて各国の商業、臣民または人民に対する均等待遇の主義を尊重することに同意なるにより、且つ両締約国が主権、保護権又は占有権を有する領域に近隣せる清帝国の諸地方に於いて、秩序及び平和事態の確保せらるることを特に念願するにより、西締約国の亜細亞大陸における相互の地位並びに領土権を保持せむが為め、前記諸地方に於ける平和及び安寧を確

保するの目的に対し互いに相支持することを約す
(以下略)

これは中学生の読む資料としては大変難しいが、あえて授業時は原文のまま見せ、下線部の両国間で取引をしている部分に注目させることだけを目的とした。清の周辺で両国が「主権、保護権又は占有権を有する領域」とはどこかと問うと、フランスはベトナム、日本は韓国であることが出てくる。事実上、そこを「互いに相支持することを約」していることは何とか確認できる。その上で、こうした関係がつけられたのはフランスとの間だけではなかったことを述べ、以下の内容を板書した。

	日本	相手国	利権を
05 第2次日英同盟	韓国	インド	相互承認
桂・タフト協定	〃	フィリピン	〃
ポーツマス条約	〃	〃	での日本の特権確認
07 日仏協約	〃	ベトナム	相互承認
日露協商	〃	満州と内蒙古	で勢力分割

こうして、日本政府がフランス政府の要求に応じたことは明らかとなる。ベトナムの留学生の多くは本国への帰国を余儀なくされ、一部は中国などへ渡って独立運動を進めたことを紹介した。

さらに、以下の文を読み、次の韓国併合の授業へのつながりを提起して授業をしめくくった。

5) アジアの民族運動指導者は日本をどう見たか
先のアジアの民族運動の指導者の日本への見方
には、別な面もある

<資料F> ファンボイチャウ

本年10月に、日本国政府は越南国の王族クオンデを国外に強制追放した由、フランス人彼を追捕中との報を得た。ああ、クオンデとは何者ぞや。アジア黄色人種の国ベトナムの一王子である。何の罪で強制退去させられたのか。愛する祖国の独立を願うがためである。…彼は、本国においてのみならず貴国においても、万国公法に照らしても、何らの罪を犯してはおらぬ。…

アジア人と欧州人とどちらが大切か。アジア人ならば、卑しきみさげすみ侮る、罪の有無も確かめず勝手に追放する。欧米人には卑下して何でもごもっともと、公理のせひに関わりなく何でも従順

に随う。アジア人であるあなた方がアジア人を卑しむ。これはあなた自身を卑しんでいることと同じだ。あなたは文明の学を身につけた文明国家の柱石である。だからこそ、あなたの思想と行動を悲しむのである。

(ファンボイチャウの日本政府への手紙

『日本の中のベトナム』そしえて文庫)

<資料G> 孫文

はからずも日本が、たまたま東アジアの海ぎわから立ち上がったので、(列強の)山分けの計略もくずれたのです。このようなとき、中国4億の人民とアジアの各民族は、一人として日本をアジアの救世主と考えないものはいませんでした。しかるに、思わずも日本は遠大な志、高遠な計画をもたず、ひたすらヨーロッパの侵略に足並みをそろえ、ついに()を独占する挙に出、アジア全域の失望をかかったことは、まことに惜しむべきことであります。

(孫文の1923/11/16付犬養毅宛書簡)

<資料H> ネルー

日本のロシアに対する勝利がどれほどアジアの諸国民を喜ばせ、こおどりさせたかということを我々はみた。ところが、その直接の成果は、少数の侵略的帝国主義諸国のグループに、もう一国を付け加えたというにすぎなかった。その苦い結果を、まず最初になめたのは()であった。日本の勃興は、()の没落を意味した。

(ネール『父が子に語る世界歴史』3)

()には何が入る?

これらをどう受け止めるか

なお、研究授業の際は、このあと、この時期を学ぶ意味を考える生徒の記述を若干取り上げたが、ここでは省略する。

(4) 日清・日露戦争期を重視する意味

——江口朴郎氏の提起に学ぶ

以下、この授業を構想するにあたって検討したことを記す。まず、やや長い引用になるが、歴史研究者である江口朴郎氏の提起を見ておきたい。

「現代に決定的な意義を持っているのは、19世紀末を中心とするいわゆる帝国主義時代の開幕期を、明治

憲法・教育勅語、日清・日露両戦争で乗り切ったことであろう。そのことが世界史の中でもつ意味はきわめて重大である。この時期の、このような日本の歴史的な位置が、二つの世界大戦の経験によってどのように反省されているかということが、現在の日本のきわめて重大な政治的争点である。保守あるいは革新という立場の基準は、端的にいえば、明治憲法・教育勅語、日清・日露戦争などにあらわれる近代日本のあり方が、1945年の敗戦、さらに新憲法・教育基本法などによって精算されているか否かという認識の仕方にかかっているともしえるのである。

すでに1世紀にもなろうという時期の歴史をどう論ずるかということが、現在なお重要な政治的争点であるという国は、現在他に類をみないように思われる。」

(江口朴郎『日本の歴史32・現代の日本』小学館)

今から20年以上も前、1976年の著作だが、現在の状況と照らしてけして古く感じられない。古いどころか、「新しい歴史教科書をつくる会」の動向など¹⁾、まさにここで指摘されていることが、現在の歴史教育をめぐる重大な争点そのものとなっている。この江口氏の提起にどうこたえる実践を行うか、近現代史学習の大きな課題であると自覚させられる。今回の実践は、このような課題意識を前提として取り組んだものである。²⁾

(5) 教材研究上の視点

——井口和起氏の研究に学ぶ

今回の授業では、日清・日露戦争を世界の中に位置づけてとらえさせることを重視した。その際に、中心的に参考にしたのは、井口和起『日露戦争の時代』(吉川弘文館：歴史文化ライブラリー41 1999年刊)である。この書からどのような視点を学んだか。井口氏が「あとがき」で記している日清・日露期の研究史のまとめを簡単に整理すると次のようになる。

1960年代まで：「帝国主義戦争」か「絶対主義戦争」かなどの論争

1960年代前半：国際的な政治過程の一環としてこの戦争を位置づけて再検討し、日本の近代史像全体をこの観点から再構成する方法論の提起

1970年代：軍事史、朝鮮史、民衆史研究の進展

その上で江口氏は、「この書で描こうと思ったこと」を以下のようにまとめられている。³⁾

1 19世紀末から20世紀はじめころの世界政治の姿と東アジア世界が直面した課題、その中で日本が歩んだ道とそのもつ意味

2 70年代以降の研究を組み込んだ日露戦争期の時代像

今回は、おもにこの1から学んでいる。同氏のこれまでの研究を集録した『日本帝国主義の形成と東アジア』(名著刊行会 2000)とあわせて、日英同盟から韓国併合に至るまでの日本の国際社会における歩みを確認することができた。⁴⁾

(6) 今回の授業化に際して

歴史学習のプランを構想するとき、次の視点を重視したい。⁵⁾

イ 社会の仕組みの違いをもとにして時代の違いをとらえること(時代区分・時期区分)

ロ 大きな発展の流れとして歴史をとらえること

ハ 日本史を世界史のなかでとらえること(国際関係、普遍と特殊の二面で)

ここから、日清・日露戦争期の授業の課題・ねらいとして以下の点を考えた。ただし、これはとくに中学向けというわけではなく、一般的に考えてみたものである。後述のように、中学、高校でそれぞれどう取り上げるかは、重要な検討課題である。

1 日清戦争後の中国にもたらされた状況に象徴される時代を「帝国主義の時代」ととらえる。利権を相互承認する網の目の条約を通して、これが「世界的な体制」であることを具体的にイメージできるようにする。

2 日清戦争の結果、日英同盟の成立、日露戦争後の状況など、「アジアの中の日本」をこの世界のなかでとらえる。「帝国主義の世界」は日本の外にあったものではなく、日本もこれを形成する一員であることをみる。

3 肉弾戦と近代戦争のはじまりという両面から日露戦争のイメージづくりを重視する。第一次世界大戦における総力戦の認識へつなげていく。

4 こうした中での日本国民(民衆)の状況を考える。増税と生活、兵士の状況、主戦論と反戦論、アジア観、「外に帝国主義、内に立憲主義」の問題などがあげられる。

5 最終的には、帝国主義の世界を変えていく力が、第一次大戦を経てどう育ち、さらに第二次大戦後の世界でどう強まっていくかの事実をみることにつなげる。その中で日本の課題を考えていく。

今回の中学の授業では、5は今後の課題であり、4も十分に扱うことはできなかった。おもに1と2の事実をしっかりととらえさせることをねらいとして

いる。

また、この学習を進める際の私の授業は、基本的にはいわゆる講義式のものである。全体に対する問いかけを重視し、生徒との対話に心がけてはいるが、討論や、生徒自身の調べ学習、自由な見解の表明というようなことを授業の中心にはしていない。生徒が自ら調べ、自分の意見をもって学んでいくことが重要なのは当然のことだが、たとえば日清・日露戦争を生徒だけ学んだときに、世界的な視点におのずと行きつくことはまずないであろう。今日の文化・思想状況の中で、どのような本や見解に出会い、どのような問題意識を育てることになるかも重要なことである。日清・日露戦争にかかわる基本的な事実とその関わりをとらえ、その上で生徒自身の自主的な学習が進められる、というような手だてが必要なのではないだろうか。私は、今、第二次大戦後の学習の中で、地理の学習でも手薄にならざるを得ない「アジア・アフリカ諸国の独立」を生徒に調べさせようかと構想を練っている。大きな歴史の変化をみることで、上記の5の課題に取り組みたいという意図である。

(7) おわりに——これからの課題にふれて

今回の授業の視点および使用した教材は、中学よりも高校世界史・日本史で取り扱われることが多いようである。本校でも、高校世界史担当者が同様の実践を経験している。それならば、この授業は中学生にはむずかしく、適切ではなかったのだろうかという、そうは思えない。この後の韓国併合の授業の「ハグ密使事件」のところで、韓国の使者の訴えは万国平和会議でどうなったと思うかの問をだしたところ、帝国主義の国々が条約を結びあっている中で取り上げられるわけがないという声が出た。すべての生徒にといいわけではないが、知識が一定定着している。「帝国主義の世界体制」を中学生でも基本的に学ぶことができる。

中高どちらで学ぶにしても、こうした事実を知っておくことは、近現代史における日本とアジアの関わりを考える上での欠かせないことであろう。中学で学んだ場合は、この上に、自主的な学びを含めて高校ではさらにどのような学習を積み上げていくことができるのか。あるいは、これらは高校で学ぶとしたら、中学ではどのような学習を進めておくことが必要なのか。日清・日露戦争期をまったく別な視覚から取り上げようという一部の人々の動きも起こる中で、あらためて前述した江口朴郎氏の提起を受け止めていくために、

いっそうの実践の積み上げとその交流・検討が求められているという思いを強くする。

注)

- 1) 鳥山孟郎「日露戦争とアジア(高)」(歴教協『歴史地理教育』321号 1981)、今野日出晴「日露戦争とヴェトナムからの留学生」(『いま学びたい近現代史』教育史料出版会 1997) 参照
- 2) 「『東郷ビール』という伝説」など、「東郷ビール」で検索するといくつかこの問題を論じている。
<http://village.infoweb.ne.jp/%7Erakko/Finland/Elamatorgo-j.html>など
- 3) 遣唐使については、『国史大事典』(吉川弘文館)に一覧表が載る。また、明治初期の留学生について、最近、遠山茂樹「幕末・維新期の留学生」(『歴史地理教育』No.616 2000年11月号)が書かれている。
- 4) 「新しい歴史教科書をつくる会」(会長は西尾幹二氏)は、南京大虐殺や「従軍慰安婦」を載せる現在の教科書は「自虐的」と批判して、自由主義史観研究会の藤岡信勝氏や漫画家の小林よしのり氏も加わった「新しい」教科書作りをしている。教科書ネット21事務局長依義文氏のホームページによれば、その白表紙本には「日露戦争は、日本の生き残りをかけた壮大な国民戦争だった。日本はこれに勝利して、自国の安全保障を確立した」と記され、日露戦争の歴史的な意味が日本の立場からのみ記述されているという。
- 5) 江口氏は、日清・日露期をふり返る際の戦後世界のとらえ方についても重要な視点を提起している。たとえば、次のように述べている。

「現在の状況の特徴は、諸国民・諸民族が抵抗するだけでなく、経済面をもふくむ建設的な主体性をもってることである。世界のあらゆる地域で、そのような下からの人民的な力が自主的に広い連帯のもとに、どう生きていくかという方向を積極的に示そうとしている。ここにこの四分の三世紀の世界史の大きな変化がある。

このような状況の下で、一方において1900年の時期における日本の位置が、徹底的に反省さるべきものであることはいうまでもないことである。しかしそれはその時代の日本がよかったかわるかとか、その当時の軍国主義的なありかたを復活させてはならないというような判断だけでは不十分であるように思われる。むしろ日本人に要求されているものは、過去を反省することだけではなく、むしろ新しい視野に立って、世界に積極的に貢献することであるといえるであろう。」(前掲書)

現代史(いわゆる戦後史)を含めた歴史学習全体で何

をめざし、日清・日露期の学習がその中でどう位置づけられるのかを考えると、この提起は示唆に富んでいるように思われる。なお、井口和起「近現代史の『見直し』論と日露戦争—江口朴郎『日本の歴史32巻』『現代の日本』に寄せて」（『歴史地理教育』No.557 1996年12月臨時増刊号）も参照されたい。

- 6) 井口氏は一方で、この書で取り上げなかったこととして「研究蓄積の大きい日本のこの時期の経済構造との関連からこの戦争をとらえることは、いっさいしていない」と記している。歴史学習の課題では、「産業革命」と日本資本主義の成立をどうこの時期の歴史像と関連させて扱うかということであり、この書の続編を熱望したい。
- 7) 2に関わることも、日露戦争時の民衆の具体的な状況や軍隊のこと、「大正デモクラシー」への展望など興味深いのが、今回の中学の授業では一部にふれるにとどまった。高校の歴史学習で大いに参考にできるように思える。
- 8) 拙稿「遠山茂樹『歴史学から歴史教育へ』を読み直す」（『歴史地理教育』No.596 1999年7月号）参照
- 9) この時期にかさなる産業革命——戦前の日本資本主義社会の成立を、どう日清・日露戦争と関わらせて取り上げるかの検討もできていない。やはり、取り上げるべき基本事項をどうおさえ、中学・高校でどう扱うかのしっかりした検討が課題である。⁶ 参照。